

フジコー技報第25号によせて

株式会社神戸製鋼所
代表取締役会長兼社長

川崎 博也
Hiroya Kawasaki



(株)フジコーと当社神戸製鋼所とのお付き合いは古く、当社加古川製鉄所が、高炉一貫製鉄所として稼働した昭和45年直後に、加古川事業所を設立されてから始まったものと承知しております。

当時はまだ連続鑄造の対象量も少なく、主流であった造塊プロセスの鑄型修理をお願いしたことから始まり、その後連続鑄造比率の高まりに即応して、連続鑄造用の鑄型・ロールセグメント整備、或いは焼結工場のクラッシャーなどの特殊溶接肉盛、更には製鉄所内の保全整備・修理工事対応の分野まで協力範囲を拡大頂き、現在に至っております。まさに加古川製鉄所の変遷・発展と共に歩んでこられた歴史といえ、ご尽力頂いた多大な貢献に対し、改めて感謝申し上げる次第です。

私自身、加古川製鉄所の設備部門出身であり、入社当初から長きに亘り、設備改良などの業務を通じて、フジコーさんの技術や知見の素晴らしさに触れて参りました。技術力や発想力といった成長の糧となる多くの経験をさせて頂いたことが思い出され、一個人としても感謝の念を抱かずには居られません。

ここで当社製鉄事業の変遷に少し触れますと、本年10月末に神戸製鉄所の上工程を休止し加古川製鉄所に統合集約する、「鋼材事業の上工程集約」を敢行いたしました。当社事業において大きな変化が生じたものといえます。

昭和34年の第1高炉の火入れ以来続いてきた、神戸製鉄所の上工程を休止する意思決定に際しては、種々検討を積み重ね、当社鋼材事業が今後も生き残っていく上で必要不可欠な事業計画であることから、大きな決断に踏み切りました。しかしながら、当社における高炉一貫製鉄の発祥の地であり、過去からの歴史の中で鉄鋼事業部門の礎を築いてきたこと、また阪神淡路大震災を乗り越え、復興のシンボルとして貢献してきたことなどの背景から、最終決断に至るまで大いに悩んだことを、昨日のことのよう思い出します。

集約・休止後、神戸製鉄所の上工程の跡地には、関西電力様の電源入札募集に応募する形で火力発電所の増設を計画し、建設工事に着手したところです。

電力卸供給事業は、製鉄所での既存インフラや自家発電のノウハウを活用する形で誕生し、2002年より本格的に事業を開始しております。今では、鉄鋼やアルミ・銅といった素材系事業、圧縮機や建設機械といった機械系事業と並ぶ、3本の事業の柱の一角を形成するまでに至っておりますが、当社にとっては、事業が変遷する過程において、鋼材事業から派生した代表的な変革事例の一つと捉えております。

また、この度の新発電所の建設も、鋼材事業の上工程集約と同様に、当社事業上の一大変革に位置付けられるものです。

本件を通じて、企業を預かる経営者として、また一人の技術者として、従来より培ってきたインフラ、技術力、人材などの経営資源を活かしつつ、昨今の事業環境の変化や技術進展、製品ニーズの高度化に対応し、生き残りをかけて常に变革していくこと、すなわち「変える」姿勢を貫くことが、何よりも重要であるといった思いを殊更強くした次第です。

私の抱くフジコーさんという会社は、当社のみならず、国内外の製鉄所で得意領域の材料、鑄造・溶接・溶射技術を武器に、さまざまな挑戦を地道に積み重ね、現在の地位や体制を構築されてきた技術立社であるというものです。

製鉄所の設備はご承知の通り、高温・高圧下で摩耗や腐食といった、過酷な運転条件に晒されるものが多く、これらを克服する機器の性能や信頼性が、製鉄所の安定稼働を左右するといっても過言ではありません。

フジコーさんは、これら設備群の中でも特に過酷な使用環境領域と思われる、焼結工程や連続鑄造機、熱間圧延工程といった部位において、その寿命や信頼性向上に寄与する材料、溶接・溶射技術を得意にされています。

これら部位に使用される部品類の品質向上は、熱や材料接触といった複合要素が混在した評価・解析が困難な部位であること、微量な元素配合や熱処理の条件により、その品質特性が大きく変化すること、そして試作、実機テストとその評価など、改善や開発の成果把握に時間を要すること等から、地道かつ継続的な取り組みが不可欠です。

こうした取り組みは、極めて困難な技術領域下にあるといえ、必ずしも良い結果へと直結するわけではないことから、ともすれば忌避されがちなように感じます。

フジコーさんは、こうした困難な技術革新にも、継続的かつ挑戦的に取り組むことが社風として深く浸透しており、「ものづくり」を標榜するメーカーとして、一つのあるべき姿を示されているよう

に受け止めております。

製鉄業は久しく成熟産業とされ、また、製鉄設備やフジコーさんの中核をなす、材料・溶接・摩耗・腐食などの要素技術も、画期的な技術開発や革新が難しい領域と捉えられがちです。しかしながら、かかる見地に翻弄されることなく、仮に外からは些細な取り組みと思われようとも、現場や現物に根差した着実な現状把握に加え、それを一歩でも先に進めるべく挑戦を続けるフジコーさんの姿勢は、現状維持に甘んじることなく、良い方向へと「変える」ことを追求する、ものづくり企業のあり方を改めて教えられる思いです。

フジコーさんは社訓第一条に「常に夢と計画性を持ち、人生意気に感ずべし」と掲げられています。

挑戦的な技術領域への取り組み姿勢や当社製鉄所における種々の貢献は、まさにこの社訓を体現したものに他ならないと受け止めております。従来より培ってきた技術や事業を中核に据え、長年に亘り衰退させることなく、確固たる地位を築かれてきたことは特筆すべきものです。にもかかわらず、決してその地位に安住することなく、夢と計画性のもと、将来に向けて確かな足取りで歩まれている姿は、フジコーさんの強さの源泉といえ、関わる全ての人々に安心感と明るい未来を感じさせるものです。事業領域こそ異なるものの、当社の志しに通じるものがあり、親近感を抱かずにはられません。

海外勢の台頭や炭素繊維を例にした新技術の進展に伴うパラダイムシフトなど、我々製造業を取り巻く環境は引き続き厳しく、わずかな楽観も許されません。当社グループも同じ製造業に身を置くものとして、フジコーさんと手を携えながら切磋琢磨し、ともに前へと進んでいく決意を新たにすると共に、限界を設けず「意気に感じて」挑戦するフジコーさんの姿勢に共鳴し、お互いに更なる飛躍を遂げていくことをここに誓い合いたいと思います。

【履歴書】

かわさき ひろや

川崎 博也

昭和29年 8月 4日生

【学 歴】

昭和55年 3月 京都大学大学院 工学研究科 修士課程 機械工学専攻修了

【略 歴】

平成13年 4月 鉄鋼部門生産本部神戸製鉄所発電所建設本部工事部長

平成13年 9月 鉄鋼部門I P P本部建設部長

平成14年 10月 鉄鋼部門加古川製鉄所設備部長

平成18年 4月 鉄鋼部門加古川製鉄所副所長

平成19年 4月 執行役員

平成22年 4月 常務執行役員

平成24年 4月 専務執行役員

平成24年 6月 専務取締役

平成25年 4月 代表取締役社長

平成28年 4月 代表取締役会長兼社長

現在に至る